



MUGENDO

# Marathon

Part2

Sample

For Adults Only

# **MaraSon Part2(sample)**

とりさん

以下本編より抜粋。書式は本編と同一です。あなたの環境で正常表示できるかご確認下さい。本編には伏せ字はありません。

## **1**

1

僕は部屋を片づけ、手早く掃除をして、「行為」の痕跡を全て消した。汚れたシーツを洗濯機に放り込んだ。あまり家には呼ばないが、こういうのはさつさと片づけた方がいい。気分的に日常に戻れない

くなる。「道具」の類もクローゼットの奥にちゃん  
としまった。予定通りならまた来週には、活躍する  
ことになるわけだけど。

ご飯を炊いて、作り置きのカレーを温めてかけ、  
昼飯にした。朝飯抜きになつてしまった。

大樹君も朝飯抜きだな。今頃どうしているだろう。  
「気持ちの切り替え」どころじゃないだろうな。明  
日は普通に学校に行けるんだろうか。かなりひどい  
ことをしたと思う。でも僕には後悔はない。それど  
ころか満たされた気持ちでいつばいだ。

僕はビデオのデータをパソコンに吸い込み、一通  
り鑑賞した。素晴らしきだった。自らを……ち  
よつと見、強く強要された上の行為には見えない。

淫らな少年奴隷。貴重な映像だった。値段なんてつけられないくらい。

夕食後、僕はスカイプにログインして、ある友人のログインを待った。彼のハンドルネームは「れいじくん」という。

3 彼は僕に輪をかけて実行派で、僕より少し若く、僕が勤務医になってから行動面では隠遁気味だったのに対して、バリバリの現役だ。何人かと組んで、■学生を対象にした塾を経営している。困った男だ。でも実際はかなり慎重で、計算高く、僕のこつち方面の友人では、もつとも信用できる。■の「恋人」を持つ彼は現在進行形で、もうすぐ■から仕込んである。大樹君より一つ上だ。

いるから、かなりのことが出来る。去年のゴールデ  
ンウィークに、■ ■ になったばかりのその子に会え  
る機会があった。あれいじくんが3Pをしたと言  
うのだ。僕は嫉妬心もあつたけれど、もちろん飛んで  
いった。彼と僕は好みが似ている。「だいちゃん」  
と呼ばれて、いるその彼の「恋人」は、大樹君よりは  
少しぽちちやりして、からだも大きめだけれど、  
とてもかわいかった。い、て、からだも大きめだけれど、  
だいちゃんはいじくんの言うままに、僕のペニ  
スを……

まあ、異常なまでの体験に、精神的に社会復帰で  
きるまで時間がかったのを覚えてやる。道すがら  
見かける少年の誰も彼もを、犯してやりたくなつた。

僕たちは二人とも自宅サーバーを持っていて、互いに、二人だけがアクセスできるエリアを持っていて、る。本当にきわどいオリジナルのデータを持って、共有していた。このところ僕のは古いのばかり、彼は現在進行形の。いちやんの動画が主だ。十二月には、青姦までしていた。彼らはどこまで行くのか僕にもわからない。彼はや々とオンライン状態になった。

J U N .. こんばんは  
J U N .. おひさし  
たの元旦那やなかっただっけ  
れいじくん.. そうだったかな、ま、今年もよろしく

J U N … その挨拶もう遅いつてw  
 J U N … それより今日は大事な用がある。例のフオ  
 ルダを見てくれ  
 れいじくん… お、新年早々新ネタ？ 楽しみー  
 れいじくん… どうかいな。H D 動画だね。  
 J U N … うん。今回はとびきりの危険物だ。取り扱  
 い注意で頼む。今回ますます楽しみだね  
 れいじくん… ますます楽しみだね

数分、沈黙が続く。互いに光回線とはいえ、十分  
 以上のH D 動画は、相当重い。

れいじくん… きた！  
 J U N … 開ける？  
 れいじくん… OK みたいよ

れいじくん…これ、すごいね。

れいじくん…すごいな。でもセンセイひどいね。つ

いに本性を現したって感じw

JUN…君にだけは言われたくないw それにセン

セイは君だろ

とは言ってみたものの、そういや、最初の「自己紹介」で大樹君は僕のことを「ジュン先生」って呼んでたつけ。

れいじくん…だって僕無理矢理は苦手だよ。優しいお兄さんだし

JUN…よく言うよ

れいじくん…すごい。しかもかわいい。■年生くら



J U N .. ■年生。ただ早生まれでまだ ■ ■歳だそう  
だ。いいじくん..小柄だね。癖毛がいい。目つきがたま  
らないね。色白の丸顔。胸の文字はセンスに欠け  
るけどね。

彼が見るところはだいたい、わかっている。好み  
は僕に似ている。

J U N ..余計なお世話だよ  
れいいじくん..エロい。よくここまで仕込んだね。で  
も内緒にしてるなんてひどい  
れいいじくん..僕がうらやましいとか言っておいて、  
こんな子飼ってないw  
J U N ..飼ってないw

JUN…冗談は置いてね、実は今日一日で、つていうか何時間かで、ここまで持つていった

少し間があつた。

れいじくん…マジですか！  
JUN…マジだ。どれだけヤバいことしたか、想像

つくだろう？

れいじくん…犯罪者だね、センセイ

JUN…それはお互い様だろ！

れいじくん…自由恋愛は対象の年齢性別を問わず、

合法だ。僕の法律では

JUN…そういう聞き飽きた。大いに共感する。で

も今のところ僕の問題は、他人が決めた法律の方だ

9  
れいじくん…うん

JUN…例の契約、半分冗談だったけど、今回は本気だ。僕の連絡が途絶えたら……

れいじくんとチャットを終え、僕は手早く大樹君の動画を編集した。射精部分を含む三十秒を抜き出して、携帯でも再生できるサイズと形式に変換した。HD動画は横が長い。トリムが面倒だった。僕はそのままパソコンに向かい、ブラウザからGmailのログイン画面に移動した。ログインし、iPhoneを見ながら、大樹君のアドレスを打ち込んだ。

From:JUN<xxxx.jun@gmail.com>  
To:hiroki.xxx@gmail.com

件名…JUNです。今日はありがとう

大樹君へ

今日はありがとう。君は最高だった。  
今日の君の姿を、少しだけ見てもらおうと思う。  
動画を添付した。このメールを読んだら、必ずすぐ  
に開いて、全部きちんと見ることに。君は奴隷だから、  
僕の命令は絶対だ。ただもちろん父上がそばにいた  
ら別だよ。一人で見ることに。音も出る。要注意だ。  
動画はメディアプレーヤーで開くはずだ。

明日夜、またメールを送るよ。それまでには動画を  
見ておくようにね。一人の時間、あるだろ？

12  
じゃ、おやすみ大樹君

JUN

僕はまだ大樹君にメールを送った。昨日のメールが届いていないはずはないが、特に返信を求めた内容ではない。わたしは迷惑メールに入ってしまった。可能性もない。わたしは返信を求めてみる。ようとかえたら携帯メール。今日は返信を求めた。メール着信がわかるわけじゃない。僕は仕事が終わった。復はできないから、iPhoneでメールした。七時前だった。

大樹君こんばんは。JUNだよ。昨日のメールは

見てくれたかな

返信はすぐに来た！ 三分と経っていなかった。

見ました。大樹……

僕その後、大樹君は皆勤で走っているようだった。僕の方がいい、加減だったり仕事が早出だったりして、水曜と土曜は、会えなかったけれど。健康そのものの少年だった。あの日の媚態。誰にも想像できないだろうな。僕だって幻覚だったのかと思いはじめたくらいだから。

13  
でも日曜はやってきた。一応土曜の晩に、確認メ  
ールを送った。大丈夫です、明日よろしくお願いし

14  
ます。大樹と、ちゃんと返事が返ってきていた。

## 2

このドアチャイムが鳴ったのは、一時五分前だった。僕はいそいそと玄関に走って、ドアスコップを覗いた。そして魚眼レンズの歪んだ視界には、ちょうど一人だけ立っていた。大樹君が見えた。……しかし彼は一人ではなかった。ずいぶんからだの大きい大人が、横に立っている。僕はこちらからだの翻してドアにもたれ、どの衝撃を何とせり出してくるんじゃないかと思うほどの衝撃を何とかこらえようと胸を押さえた。横にいるのはたぶん父親だ。大樹君は約束を破った！

「先生、先生？ 大樹です。こんにちは」  
僕の家にはインターネットフォンはない。大樹君は遊びに来た親戚の子みたいのに、ドアの向こうから僕に呼びかけている。ドアをノックした。一体どうなってる……

どうせ逃げられない。ひらきなおれ。

「あ、ああこんにちは……ひ、大樹君、君は……」  
僕は落ち着きを失って、しどろもどろだった。僕を見上げる小柄な大樹君の表情は、いつそう引き締まった。

「先生、約束破って、ごめんなさい。お父さんを、  
15 連れてきました」



「ごめんないって……」  
 「ごめんない？ 一体どういう意味だ？ 相変わらなく大樹君は、僕の支配下にある気なのか？ だつたらなぜ、父親を連れてきたのだ？」  
 「ごめんないさ、先生。でもどうしても、こうしなきゃいけないさ、かつたんです。お話、聞いて下さい。お願いしますから……先生。そのあと、何でもします。がんばりますから……」

大樹君の父親は、寒いドアの外で、立ちつくしていたが、彼に呼ばれてやっとな動いた。でかいドアを開くように頭を下げて、玄関の中に入ってきた。身長一八〇を軽く超える大男で、いかつい髭面だった。肌は褐色気味で、見事なほど濃い茶系地になった。服装は息子とお揃いに近く、濃

白い袖のスタジャンに、コールテンの、これも濃い茶系のズボンを穿いていた。腰周りも太い。ズボンがはち切れそうなくらい、太腿も太い。プロレスラーは「みたいだ。歳は僕より、少し上だろう。でも四十はいつてないように見えた。」

「僕、先生に会って、その後、もしかしたら、って思っただんです」

17 「先生は悪い人かもしれないけど、嘘を言わない人だと思いません。僕は形だけの慰めなんです。そんな僕には同情なんかされてもしょうがない。先生は僕に価値がある何の力にもならないです。先生は僕に価値がある」と認めてくれた。手放したくない。僕は約束、破りました。先生は約束も、守る人です。僕は約束、破りました。

だからお仕置きされてもいいです。……ビリビリは、嫌だけど……。でもがんばるから、見捨てないで……」

「ちよちよちよ、ちよつと、待つてくれ……」

「君は僕を評価してくれたようだから、そう、正直に言おう」

あれだけひどいことをした僕に、そんな発想を持ったのか、この子は。

「でも大樹君、君は一つ大きな勘違いをしている。君は僕の奴隷だ。そうだよね」

僕は幾通りかの少年愛者のネットワークを持って

いる。オリジナルの写真やビデオを売買や交換する関係の人たちは、二十人ちよい。みんな顔も本名も住所も知っていて、一度は実際に会っている。ある程度のお金と、守るべきものがあり、バカではなく、行動が慎重であることが、僕がそういう関係に人を加える条件だ。僕やれいじくんはほぼ売る側、他は買う側だ。

大樹君の表情に、期待めいたものが拡がったように見える。目がぱっと開かれていいる。会話の異常さとアンバランスな、子どもらしい愛らしさだ。小遣いを上げてやるつて言われた■学生みたいなの。小遣「ただ、君はどこからそんなことを思いついたのか、気になるな。それに父さん」

嫌な予感がするな。

「それがなくなるくらいなら僕、本当に先生にどうされてもいいです。好きなようにめちやくちやにして、殺して下さい。僕は先生のものなんだから」

大樹君の言葉には正直そられる部分もあったが、僕はさすがに手を振って、彼の話を遮った。

「めったなことを言うもんじゃないよ。それに君を殺しても僕には何の得もないし、そんな欲求もないね。でも覚悟のほどは聞いた。その気になつたらめちやくちやにしてやるよ」

「僕はね。お父さんにも相応の覚悟を決めてもらおうと思います。深い罪に踏み込み、秘密を僕と、大樹君と共有するんだ」

も。すぐには意味はわかるまい。父親にも、大樹君に

「簡単なことです。今ここで、お父さんが大樹君を犯す。言葉が強すぎるなら、セックスする、でもいい。それを僕がビデオ撮影し……」

「お父さんお願い。僕を……だからお願い、きいてよ」

ものすごくそられる、大樹君の懸命な言葉。僕は気持ちの高ぶりを抑えつつ、立ち上がった。

「傷つければ奴隷の値打ちは下がってしまう。でも目立たないところなら関係ない」

「お父さん！ ……僕、僕嫌だよ！ 助けてお父さ

大樹君をしがみつかせたまま、父親はのっそり立ち上がって僕を見下ろした。仏像にも魂がこもるところはあるらしいな。彼の目にはいくらか人間らしい生命力が蘇っていた。憎しみや軽蔑をこめた目で、僕を高いところから見下ろしている。でもね、憎しみはともかく、僕を軽蔑する資格は、たぶんあんたにはないんだよ。

「始めましょう。ベッドルームにどうぞ。……さあ！」

「恐がることはない。さあ、こつちへ」

大樹君の下着はランニングシャツだ。彼はためらうことなく、それも脱ぐ。脱衣の際の大きな腕やからだの動きで、幼くしなやかな肉体の筋肉が、薄い脂肪の下で豊かに伸縮する。あらためて美しく、エロティックな肢体だ。

大樹君が唇を離すと、父親が服の袖で唇を拭いた。何か未知の生き物を見るような目で、彼は頬を朱<sup>あか</sup>らめる息子を見ていた。「ヒロ……」と小さな低い、掠れ声が漏れた。

23  
センチ以上ある。勃起していないのに、長さは二十残念な僕の平凡なペニスと比べる



と、太さは径で倍くらいか。一応言っておくけれど、僕だって小さくはない。ごく普通だ。雁首の部分はぐつと太くて、露出した亀頭と黒々とした感じがする。まあ、大樹君のピンクの亀頭と比べればね。父親のペニスに、やっと変化が訪れた。むくむとお父くらみ、持ち上がってくる。大樹君はさらに、お父さんのペニスに鼻息がかかるほど寄って、一心不乱に手を動かしている。額に汗が浮かんで、頬が朱らんでいた。

子どもは変わりやすい。変えやすい。彼の常識、価値観、道徳は、僕が作る。大樹君は僕のものだからだ。

父親のペニスはお腹の方に近づくくらい十分に勃

起した。でかいな。ゲイビデオの巨漢の黒人にも見劣りしない。弓形にそそり勃った大人のペニスは、大樹君の唾液でてらてらとして、かたそうで、それ自体が一個の淫らな生き物のようだ。

「く……」

君の頭を押し、腰を引いた。濡れた龟头と大樹君の舌の間に、唾液が糸を引く。たぶんイキそうになつたわけじゃないな。

「お父さん……」

耐え難い快感、というのも考えてみれば逆説的な表現だ。

早く異常さに慣れてしまえ。楽になれるぜ。

大樹君は右手でお父さんのペニスを握ったまま僕にうなずいて見せた。口の周りは唾液まみれだった。もしかしたらお父さんの先走りもね。

ぼんやりした目で、ゼラチンの塊みたいな精液を舌に乗せ、口の端からよだれを垂らす大樹君のアツプを撮った。

## 4

それから、バルーンって器具だ。これはアナルに入れてからポンプで空気を入れてふくらますわけにけど、僕の中にはもう一本ホースとポンプがついてい

て、バルーン先端に向けて突き抜けている。栓をした直腸内に、液体を注入できる。しつかりふくらませば、多少圧力をかけても抜けない。

すごい肉体だ。褐色の肌に包まれたその大きな体躯の、肩の筋肉は盛り上がり、胸筋はせり出し、腹筋はきれいに割れて、無駄な脂肪はごく少ない。わずかに腰のあたりにたるみがあるくらいだ。ある時期までは息子と一緒に毎日ジョギングしていたわけだけども、どちらかと言うと短距離型、たくさん筋肉のついた肉体だった。

「く！　う！」

27  
ろ　大樹君は激しく反応した。意外な感覚だったのだから。力んだからだをねじって、僕とお父さんの方だ

内を見る。自分の尻の穴がどうなっているのか、体  
で何が起きているのか、彼には確かめることが  
できない。

「あ！　だ……め！　くる、しい」

大樹君はくつと首を持ち上げて、続いて、ちよう  
ど犬が体毛にしみた水分を弾き飛ばす時みたいに、  
下半身を震わせた。

「大樹君、どうした？　どうしてほしい」  
「くる、しい。ぬい、て……」

大樹君は涙目で、高い掠れた声で、僕に訴える。  
お父さんはポンプを手にしたまま、かたまつている。  
「ここで抜いちやって本当にいいのかい？　お父さ

大樹君のからだをきれいに拭いて、寝室に戻った。とても寒そうだ。これからお父さんに温めてもらうといい。僕は父親に全裸になってもらう。いったん引き締まった腰は、臀部へと向けた立派な太腿は、皮膚の上、ズボンの上から筋肉の走りがよく見えた。胸毛は、太腿のほからでも筋肉の走りがよく見えた。下から陰部、太腿のど毛深い方では、しっかき大人の体毛に覆われている。

## 5

「ん！」  
「あ！」  
「まっ、まっ……あ」  
大樹君は手を上げて僕の言葉を遮った。

「今性器は萎えているが、それでも僕の勃起時より大きかった。残念だ。」

「大丈夫ですよ。申し訳ないが、先週僕は大樹君とアナルセックスしました。ああ、こういう言い方がフェアでなければ、僕は、僕は大樹君を、レイプしました」

「ん……」

大樹君はちよつと白い歯を見せ、短い声を漏らした。ぞくぞくつとからだを震わせながら、人さし指を押し込んでいった。すぐに根本まで入った。

二本に増やされた、節のある大人の指が、大樹君のアナルをいびつに拡張ながら侵入した。

「ん、ああ！」  
 遠慮のない声が大樹君から漏れ、そして右手が、  
 お父さんの腰に伸びた。抱きつく。お父さんも右腕  
 をしっかりと大樹君の首の後ろから背中にし、抱  
 き寄せた。慣らす指は動き続ける。

大樹君を再び仰向けにさせた。タッパの差が圧倒  
 的だから、腕枕のまま、左手で十分大樹君のアナ  
 ルを責められる。父親はバイブの根本、電池の入っ  
 たコンドームに押し当てた。先端の小さな玉を大  
 樹君のアナルに押し当てた。

父親は大樹君のペニスを左手の三本指でつまむ。  
 彼のごつい手の、全部の指で握るには大樹君のモノ  
 は小さすぎるのだ。



ガチガチで、そろそろ本番と行こう。父親のペニスも、  
 亀頭の先の鈴口は、たつぷりとカウパー腺液を流し  
 出していた。

## 6

彼の目つきには今や、酔った人間のような独特の、  
 理性から解放された者の輝きがあつた。

でも感覚はまるで違う。対象は我が子で、まだ発  
 毛もない、しかも男の子で、性器の犯す先はその肛  
 門だ。

大樹君がそのお父さんの手首を、足から離した手でぐつと握る。

快感の吠えるような短い声をたびたび漏らし、激しく腰を使った。限界の深さまで突かれるたびに、大樹君のからだは前にぐつと押され……

淫らな、湿った摩擦音。親子の荒い息遣い。いかつい大男の、動物的な目つき。力のこもった下半身の筋肉の隆起。

「ん！ イッ！ ア、ア、あ！ おとう、さん！」  
「ヒロ……！」

## 7

その時、大樹君が、

「あのう……」

と何か言いにくそうに話しはじめた。

「何かな」

僕は座り直し、大樹君に微笑みかける。

「お願いが……」

大樹君は、上目遣いで僕の反応を窺うようにして

ぼそぼそと語る。

「いいね。じゃ、ご主人様として、もう少し君に注文しよう」



「お父さんが……」  
「お父さんが？」

お父さんに何かあったのか」

「続きは本編で！  
約五九〇〇〇字。」

本編は108P。7章＋エピローグ。